

商標登録で  
“企業防衛”

確かな提案力

我々弁理士が親身についてご相談にじます。

井澤国際特許事務所

RIE MAKOTO KAN MOGI SHOKO



2025年は、国際協同組合年

# 2025年「ミス日本みどりの大使」に佐塚こころさん！



2015年からミス日本コンテスト事務局と林野庁、(公社)国土緑化推進機構が連携してスタートした「ミス日本みどりの大使」(2022年までは、ミス日本みどりの女神として、そして2023年

よりミス日本みどりの大使に改称された)は、(一社)ミス日本協会が主催する「ミス日本」各賞の一つである。同大使は、未来に繋がる豊かな緑を守り育ててきた取り組み

や、生活に根ざした日本の木の文化を尊び、みどりや木とのふれあいを通じて、みどりと木への親しみを広める役割を担う。具体的にはメディア等へのパブリシティの促進、イベント等における注目度の向上、さらにはその若さや美しさから森林や木の新たな価値や重要性をわかりやすく発信することも期待されている。

### ■学ぶことが大好きな現在8種の資格保持者

今年の「ミス日本みどりの大使」は「学ぶことが大好き」という佐塚こころさんです。資格検定などを通じて目標に向けて勉学を進めることはもちろん、調査や実体験を得ることが大好きだという現在、国際基督教大学1年生です。ご出生は長野県佐久穂町という農山村地域に生まれ、祖父が猟師であることや、また地元林業関係者により構成される「さくほ森の子育成クラブ」により、小4から中1まで一貫した林業キャリア教育を受ける機会を得られたとのこと。また、佐久穂小学校では緑の少年団に所属し、学校林での植樹活動が思い出深いと話します。祖父は長野と北海道で狩猟をしており、祖父を通じて山や獣との共生を考える機会に恵まれました。そして高校生の時にガム大学に訪問した際、英語で書道を教える機会があり、その時、聴覚障害の生徒に出会います。「もし私が手話を使えたら、もっと多くのことを伝えられるのに」と

考え、それから手話の勉強に打ち込み始め、いまの目標は、2025年に開催されるデフリンピック大会にボランティア参加し、聴覚障害や手話への理解を多くの方々に広げることですといます。取得資格は英検準1級、漢検準1級、日本語検、日本史検、硬筆検、毛筆検、秘書検、数検などなど、合計8種の資格を取得し、現在は先述の手話を独学で学びつつ、さらに他の資格にも挑戦中とのこと。将来の希望は、「障がいや言語の壁に囚われないアナウンサー。人前でお話することに物怖じせず、どんどん挑戦していきます」と明言。座右の銘は、100点と99点の差は1点じゃない／事上磨練。

もし、世界の学生100人というカテゴリーがあったなら、間違いなく入れたいお一人ですね。志高き“みどりの大使”、日本そして世界をよろしく



2024年「ミス日本みどりの大使」安藤きりりさん(左)と  
参考: (公社)国土緑化推進機構HP

## 発泡スチロール協会(JEPSA)の出張(出前)課外授業—「スタッキングボックス」

皆さんは「スチレンピック」という言葉をご存知でしょうか。発泡スチロール協会(JEPSA、東京都千代田区)がその会員(原料メーカーや成形加工メーカーなど)企業に従事する人たちを対象に開催する協会独自の競技です。スチレン(styrene)は英語、スチロール(styrol)は原料の名でドイツ語からそれぞれ派生したといわれ、基本的には同じもの。その「スチレンピック」とは、発泡スチロール箱を積み上げる高さや運ぶスピードなどを競います。第一回の「スチレンピック」は2016年10月22日に滋賀県で開催されました。腕自慢たちが集合し、日頃の仕事で鍛えた“凄ワザ”を披露し、個人戦、団体戦のほか、アトラクションやパフォーマンスのステージもあり、参加者全員が楽しめる大会となっています。

### ■学校キャラバン・「STACKING BOX」に小学生がチャレンジ！

「スチレンピック」はこれまでに様々なテレビ番組で取り上げられ、数多くのアスリートやタレント達が挑戦しています。そこでよりたくさんの方々にチャレンジしていただくために生まれたのがこの「STACKING BOX」(スタッキングボックス)です。

JEPSAでは広報活動の一環として、発泡スチロールの特性を楽しく学んで、体験する出張課外授業

〈「STACKING BOX」チャレンジ〉を昨年秋より国内の小・中学校で開始し、今回で8校目となります。スタッキングのスタック(stack)とは英語で、～を積む、積み重ねる。という意味ですが、私たちの日常では、スタッキングチェア(積み重ねられる椅子)などはよく耳にし、目にするのではないのでしょうか。

さて去る2月17日、高山学園つくば市立真瀬小学校(茨城県)の体育館へ「軽くて丈夫な発泡スチロールの特性を活かして、どのように箱を積み上げるのか」取材に伺いました。

当日は1年生から6年生までの全員参加で、1回2学年で、3ステージに分かれて行われました。まずは司会進行を務めるおねえさんが、壇上で発泡スチロールの特性(製品の98%が空気の省資源、軽くてクッション性や断熱性に優れ保温・保冷での輸送や住宅断熱材として、また家電や精密機器を衝撃から守る緩衝材として活用など)についてプチ・レクチャー。そこへイチローのパフォーマンスで有名なニッチロー(本イベントのアンバサダーを務める)が登場し、箱の積み方などを実演(この模様はリアルタイムで教室に待機している児童らにオンライン配信しているため、説明の重複が省けます)。今回の箱の大きさは小中学生用に重さを軽減したサイズなので通常よりもコンパ

クト。そして本番前のデモンストレーションには熟練の匠が体育館の天井ギリギリまで20段をすんなりと積んで見せてくれました。今までの小学生最高記録は6年生の14段とのこと。いざ記録更新を目指して生徒たちは挑みます！

### ■不思議と一体感の漂う新種のスポーツ？！

まず現場から伝わってくるのは、それぞれのグループで、記録よりも発泡スチロール箱が崩れ落ちるときに自然と発する声にこのゲームの醍醐味ともいえる一体感や共有感が見てとれたこと。教務主任に感想を訊ねると「競技者と応援者と誘導者(スタッフ)またはその箱たちが一つになって、しかも安全に競技できるところがとても素晴らしいと思います」と答えてくれました。記者も入れ替えの合間にチャレンジしましたが、確かに箱を持ってしまうと前が見えないので、上・上、前・前と大きな声でリードしてくれるスタッフの重要性を実感し、また主任が言われたように三位一体にも四位一体にもなれる貴重な新しいスポーツのようにも思われました。イチローならぬニッチローもこの日ばかりはバットでボールではなく箱の微調整役に専ら徹していました。会場では練習無しのたった一度きりのぶっつけ本番にドキドキ・わくわくと楽しそうに挑戦する姿が見られ、記録更新すらならなかったものの、各終了後にはさわやかな笑顔が体育館に満ちあふれていました。(敬称略)



おねえさんやニッチローによる説明



達人(匠)の高積み実演



両手を広げてころはひとつに



記録員や応援者、みんなの視線が



ちょっと整えて、さあ、もっと高く